

「東遊日記」から見る昭和初期の東京

松野友美*

目次

はじめに
第1章 来日中国人をめぐる日中情勢
第2章 東遊日記から見る東京の様相
第1節 中国人のみた異文化東京
第2節 1930年代中頃以降の記述から見る東京の先進性
第3章 日中情勢と東京をめぐる来日中国人の視点
おわりに

キーワード 東遊日記 中国人 昭和初期 東京

はじめに

江戸や東京は「外」の人から見るとどのように見えたのか。「外」からの視点に着目することで、「内」からは気づかない江戸、および東京の姿が見えるのではないか。このような問題意識から、「外」から見た江戸、東京を捉えようと、江戸東京博物館、都市歴史研究室において調査が進められた。調査は主に二つの観点から行われた。一つは、日本国内の各地方から江戸を訪れた人々の視点に焦点を当てた、「地方人の見た江戸」に関するものである。そしてもう一つが、「外国人の見た江戸、東京」であった。本稿は後者に属し、中国人による視点に焦点を当てて行った調査を基に記したものである。

調査では、東京都立中央図書館特別文庫室が所蔵する、実藤文庫の一部をなす「東遊日記」の中から、来日中国人による東京に関する記述を主に収集した¹⁾。実藤文庫は、中国研究者であった実藤恵秀(1896-1985)による寄贈書で構成され、「東遊日記」のほか、中国人向けの日本語学習書や、中国語訳された日本人による著作物など、清末以降に刊行された日中の交流に関わる資料が含まれている²⁾。調査の対象とした「東遊日記」とは、中国にとって東にあたる日本に、留学や旅行で訪日した中国人による日記類を、実藤が総称した呼称である。特定の人物による日記を指すのではなく、日本を訪れた複数の中国人がそれぞれ記した日記の総称として「東遊日記」という名称を使用している。実藤は、戦前戦中にかけて多くの日記を収集しており、来日中国人に関する貴重な史料群となっている。多数の来日中国人

*東京都江戸東京博物館専門調査員

による史料が一括して保存されていることから、本調査では実藤文庫の「東遊日記」を主に収集した。「東遊日記」の著者は、駐日公使館の関係者や留学生のほか、旅行や視察のために短期間日本を訪問した中国人も含まれる。清末以降、日本への関心が高まり、日本留学が盛んになっていく中、訪日した中国人が、日本滞在の記念として日記類を刊行した。また、視察の報告書が刊行されたものもある。そのため、駐日公使といった公に属する人々による刊行物のみではなく、留学生や視察団など、幅広い層の人々によって著された刊行物が、「東遊日記」に含まれている³⁾。

本稿では、初歩的な試みとして、調査で収集した史料のうち、昭和初期のものに焦点を当てて紹介する。そして、来日中国人の目に当該期の東京がどのように映ったのかを提示する。加えて、史料の内容と書かれた背景への検討を加えることにより、昭和初期における来日中国人の記述を通して東京像を描くことの課題を考察する⁴⁾。

なお、19世紀以降、中国は西欧列強や日本によって領土を分割され、瓜分の危機にさらされた。状況の打開を目指し、中国よりも先に西欧に倣って近代化へ踏み出した日本から、西欧の近代性を学び取ろうと、中国から日本への留学が盛んになった。ただし日本も中国を分割していた国の一つであり、大陸部においては、20世紀初頭より、中国の東北地方を中心に勢力を拡張し始めた。そのため、中国内においても、反日感情を強く持つ者や、日本の政治影響下にて日本と接触が多かった者など、中国人と日本との結びつきは多様な様相を呈した。したがって、中国人の東京への視点を読み取るためにも、中国人を取巻いた日中情勢に対し、理解を深めておくことが重要となる。また、昭和初期の来日中国人は、日本を通して近代性を学ぶ目的の下で訪日する機会が多く、留学生として来日する者が多数に上った。中国において日本への留学が盛んになるのは、清末以降のことであり、昭和初期の留学生が置かれた状況を理解するためにも、清末以降の日中による留学政策の流れをふまえることが重要となる。

そこでまず、第1章では、清末以降の留学事業を中心に据えながら、日中情勢を概略的に整理する。そして第2章にて、「東遊日記」の記述から見える昭和初期の東京の様相について、史料を通して紹介する。とりわけ第2節では、史料の妥当性を検討しながら、1930年代中頃以降の東京の先進性を記す史料を取り上げる。そして第3章では、さまざまな政治背景を抱えて来日した中国人の言説を取り上げ、昭和初期に東京を訪れた中国人の有した視点の多様性を確認する。これらを通し、中国人のみた昭和初期の東京を多角的に検討する。

第1章 来日中国人をめぐる日中情勢

中国人の日本留学が本格的に始まる契機は、1894年（明治27）の日清戦争にある。清朝は日清戦争での敗北以降、軍事・教育の近代化を図るため、日本への留学を奨励した。留学先として日本が奨励されたのは、日本が地理、文化的に中国と近く、欧米に比して留学が容易で成果を吸収しやすかったこと、および留学経費が安く抑えられる点が背景にあった⁵⁾。さらに1905年に中国において科挙の廃止が決定されると、日本への留学生数は急増する。元来、科挙は社会的上昇のツールであり、試験の合格によって、官吏への道が開けた。科挙の廃止により、近代的な学問を修めることが立身出世への新たな道となった

ため、海外へ留学する者が増加し、日本への留学者も増加した⁶⁾。こうして20世紀前半においては、科挙廃止後の1906年（明治39）に、中国から日本への留学生数がピークを迎えた。具体的に、1906年には8,000人近い留学生が訪日するまでに至っている⁷⁾。

しかし、1906年を機に、中国からの日本への留学生数は減少に転じる。背景には、アメリカが中国人留学生の受け入れに積極的な態度を示すようになったことがある。1908年（明治41）に、アメリカは義和団事件の賠償金の大半を、中国からのアメリカへの留学生派遣事業に充当するよう申請した⁸⁾。これを受け、1910年代後半以降は、中国において、日本よりもアメリカへの留学が主流となる⁹⁾。下記は「東遊日記」に見られる、1928年（昭和3）の中国人留学生の言説である。経済面における日本留学の利点が失われていく中で、欧米留学への魅力を記している。

留日学生の学資が低廉であることは各国の中でもトップであるが、実に生活を維持するには不足する。政府が資金を出し、学生をここで困窮させているよりは、直接、欧米各国に派遣するほうが有益である¹⁰⁾。

アメリカにおける中国人留学生の招聘は、日本に比べ手厚い待遇の下で実施された。アメリカ側は、中国人留学生との交流を積極的に持ち、また、アメリカ政府が中国人留学生の帰国後の職業斡旋を担ったりもした。結果、アメリカへ留学した中国人留学生の中には、親米感情を持った者も少なくなかったという¹¹⁾。これに反し、日本では中国人留学生に対する経済補助や待遇が政策として十分に顧みられていなかった。加えて、1915年（大正4）には、中国の山東省での権益をめぐる、日本がいわゆる「対華21か条要求」を突き付けたことを受け、日本に留学で訪れても、留学生の中には反日感情を抱く傾向がみられた。このような状況に対して日本では、1920年前後より懸念が抱かれ、国策として中国人留学生の受け入れを促進する必要が認識されるようになった¹²⁾。そして、1923年（大正12）3月に「対支文化事業特別会計法」を成立することとなる。この成立により、日本も義和団事件の賠償金を用いて中国人留学生にかかわる事業や、中国での日本による教育事業が国策として展開されるようになった。この結果、日本政府から中国人留学生に対する学資補給も行われるようになり、日本からの財政援助のもと、日本に留学したり、日本の産業を視察したりする中国人人口が再び増加に転じることとなる¹³⁾。ただし、先述のように対華21か条要求による日中関係の悪化により、すでに中国において反日感情は高揚していた。そのため日本政府が実施する教育政策は、中国国内において肯定的に受け止められにくく、結局、上述の「対支文化事業特別会計法」が施行されても、日本への中国人留学生数が、再び1906年（明治39）のように勢いを取り戻すことはなかった¹⁴⁾。

1930年代に入ると、日中関係のさらなる緊迫化を背景に、留日学生の内訳に大きな変動が見られるようになる。まず、1931年（昭和6）に満州事変が発生し、日本による満州侵略、東北への侵攻が始まる。そして1937年（昭和12）7月に日中戦争が始まると、日本軍は年末までに天津と北京、そして河北省、山西省、山東省の主要都市、および鉄道を支配下に置くようになる¹⁵⁾。

日中戦争がはじまり、中国への日本の侵攻が激しさを増すと、当時、中国の中央政府であった国民政

府において最高指導者であった蒋介石は、1937年9月下旬に留日中国人学生に対して、中国への引き上げを呼び掛けた。学生の中には、国民政府による呼びかけを待たずして、自発的に帰国するものも多かった。1937年10月下旬には、国民政府の統治する中国からの留学生数は、400人ほどに落ち込んだという¹⁶⁾。

国民政府下からの留学生が日中戦争の開戦以降に減少する一方で、戦時下においても満州からの留学事業は継続した。中国の東北地方において、日本の傀儡国家として満州が建国されたのは、満州事変後の1932年（昭和7）のことである。ただし日本は、1905年（明治38）の日露戦争後から満州に進出し、大連や旅順に官立公学堂を設置し、日本人や中国人を対象に、日本人による教育を展開してきた¹⁷⁾。このため、1920年代後半になると、満州から日本に向かう留学生数が増加するようになる。この流れは満州事変発生後も変わらず、中国大陸からの留学生数において、中国の東北からの留学生が、約半数近くを占めたという¹⁸⁾。加えて、1932年（昭和7）以降、満州が日本の植民地となったことで、満州における日本の政治・軍事的な位置づけが重要になり、日本への留学が満州において出世をはたすための一手段となる。その結果、1930年中頃から、満州からの来日留学生数はさらに増加することとなった¹⁹⁾。日本政府は、上述の「対支文化事業」に加え「対満文化事業」も展開し、満州からの留学生に対しても学資補給を行い、一般の学生のほか、警察官や官吏の日本への視察をも促した²⁰⁾。このような背景のもと、1937年（昭和12）7月に日中戦争が勃発して以降も、満州からの留学事業は継続し、中国からの留学生数において大多数を占めることになったのである。

さらに日本は、日中戦争勃発後、北京や南京においても政治・軍事的影響力を伸張させたため、当該地域からの中国人留学生、および視察団の流れが継続した。具体的に、1937年（昭和12）12月以降、北京や南京にて、行政、人事面において日本軍が権力を握る下で中国人による政府が打ち立てられ、日本軍の傀儡政権が成立した。日本政府は、これら傀儡政権下において、初等教育から日本語教育を義務付ける一方で、日本への留学政策も継続して展開し、日本への留学や視察団の派遣を促進させた²¹⁾。

上記にみたように、1930年代後半の留学や視察が、日本の資金援助の下に多々行われていたことや、傀儡政権下から日本に中国人が派遣されていたことは、「東遊日記」を扱ううえでも注意を要する。日本は占領下や傀儡政権下において、日本との摩擦を減少させるためにも、親日的人物の養成を企図し、学生や技術者などを視察団として日本に派遣させた。「東遊日記」には、彼らが視察後に派遣元に提出した感想文も含まれている。したがって、日本の優れた点や先進性を取り立てて書いた場合も否定できず、史料を読む際に注意を要する。

以上、本章でみたように、中国からの留学生には、大別して二つの傾向があった。一つは日清戦争以降にみられた留学の流れであり、国民政府に引き継がれた。もう一つは、日本が中国において政治・軍事的影響力を伸張させていく中で影響力を及ぼした地域や、樹立させた傀儡政権下からの中国人留学生で、1938年（昭和13）以降の訪日中国人の多数を占めるようになった。このように、来日中国人が、複数の政治的背景を有していたことが、彼らの東京に関する記述に及ぼす影響についても配慮することが本来は求められると考える。次章以下では、この点をできる限り留意しつつ、史料の紹介と考察を加えていくこととする。

なお、日本への中国人留学生が急増し始めた1900年代初期においては、既述のように、日本政府は中国人留学生の受入れ事業を積極的には展開しておらず、文部省直轄の学校に入学した留学生数は限られていた。そのため、東京の私立学校に留学する中国人が多数に上った²²⁾。

第2章 東遊日記から見る東京の様相

東京を訪れた中国人は、東京にてどのようなモノに特異性を感じたのだろうか。本章では、中国人が東京にて感じた異文化を紹介し、彼らの目に映った東京の特徴を抽出する。第1節では、①家屋、②銭湯、③質素さ、④女性の地位、⑤愛国心について記す。第2節では、中国人が東京の生活を通して、日本から学ぶべきモノとして捉えたような、東京の先進性に関する記録をまとめる。

第1節 中国人の見た異文化東京

① 家屋

家屋については、小ささを指摘するものが目立つ。1932年（昭和7）に日本を訪れた王搏今は、東京、および日本の家屋を、「鳥籠のようである」と述べる。王搏今は、東京の代々木上原に滞在していたが、数日間旅行へ行っている間に、近所の空き地に住居が建設されていたことに驚きを示す。そして下記のように、日本の家屋について記述する。

日本の家屋は、木材の他は紙でできている。木材は大きなものはなく、すべて薄い木片、木の板である。まるでマッチ箱、弁当箱の類を大きくしたようなものである。部屋と部屋の間は、ただいくつかの紙張りの扉で、押して動かす。寝室もなく、床はただ寝る時に押入れの紙の扉を空けて布団を取り出す。朝はまた、畳んで移し入れる²³⁾。【図1】

【図1】王搏今『海外雑筆』

日本家屋が狭く簡素であるという記述は、他にもみられる。王桐齡は1903年（明治36）に初めて日本に留学し、第一高等学校、そして、東京帝国大学（現・東京大学）にて計10年学んだ経歴を持つ。帰国後、北京の師範学校にて教鞭をとったのち、再度、東京帝国大学へ派遣されている。彼は、1935年（昭和10）に執筆した『海外雑感』の中で、初めて日本を訪れた際の、東京で感じたカルチャーショックを次のように振り返る。

東京は土地が狭く人口が密である。家屋の規模は小さく、皇居、皇族の邸宅、貴族や富豪の住居と公共の建築物のほか、みなゆったりとして中庭があるものはない。著者は中国の田舎で育ち、田野の生活に慣れている。はじめて日本に到着し、突然にみすぼらしく狭い木造家屋に住むことになり、魚が鍋の中で泳ぎ、鳥が籠の中に入ったようで、座っても立っても場所がないように感じられた²⁴⁾。

② 銭湯

外国人にとって銭湯がなじみなく、とりわけ混浴など、風呂場での男女の垣根が明確でない様子が、彼らを驚かせたことを指摘するものは多い。中国人も同様に銭湯で驚嘆している。男性、女性に関わらず、東京で訪れた銭湯で仰天した記録が生々しく記録されている。はじめに挙げるのは、徐玉文の記述である。

日本人は衛生を非常に重んじている。男、女に関わらず、毎日銭湯へ一回行く。そのため、日本の公共浴場は、いたる所にあって、高い煙突が林立している。（中略）我国で清潔運動が盛んに興隆しているこの時、このような浴室は早急に推進し普及すべきである。（中略）一度浴室へ入ったが、帳場を管理していたのが一人の男性であった。膝頭を机の上において、さながら遮る物がない中で監視している菩薩のようである。当時、私は彼をみて非常に動揺した。側にいた女性を見ると、依然とし

【図2】 徐玉文「婦女的湔浴」『遊日鳥瞰』

て落ち着いて動じず、平気で珍しいとも思っていない！（中略）国内にいた時、男性の浴室では、人を呼んで背中を擦ると聞いたことがある。しかし、ただ男性が男性に代わって擦るのであり、日本の浴室でのように、男性が女性の背を擦るという奇異なものではない。まさか東洋文化が進歩したことの表れであろうか！まるで訳がわからなかった²⁵⁾。【図2】

続いての記述は凌撫元という男性の記述である。1935年（昭和10）に視察を目的に日本へ1ヶ月ほど派遣され、その間に神田神保町の銭湯へ赴いた。銭湯では、男女の脱衣場を隔てる壁が6尺ほどの高さしかなく、脱衣場の空間が完全に分断されていないことに驚きを覚えている。さらに、女性の従業員が男性の脱衣場にて作業をしていることについて下記のような記述を残した。

男性の部屋を扱っているのは、18、9歳の年頃の娘で、見たところ未婚のようである。背は高くなく、裸足で軽く髪を結び、日本の和服を着ていて、花や蝶々のように綺麗である。私は門に入ると、数十名の男性が身に糸もまとわず、妙齢の女性を取り囲んでいて、びっくり仰天し、三歩退いた。しかしこの女性を見ると、慌ても騒ぎもせず、一言「どうぞお進みください」といい、玉のような手を伸ばして大きな竹の籠を手渡し、私の顔の前に差し出した。私はますます一層訳が分からなくなった。（中略）私は、その日本人の客が衣服を竹籠にほおるのを見た。袈裟を脱ぐようで、脱ぎ方があけっぴろげである。女性の店員が前に立っていて、鷹揚に竹の籠を脇へよせて、道を作ってやっている。私は、手ぬぐいを竹籠の中に忘れたところ、女性の店員が私に一声かけ、手ぬぐいを私の手に渡してくれた。このような鷹揚な態度には大変に驚いた！²⁶⁾

③ 質素

次に、質素さに関する記述を取り上げる。上野公園、芝公園、日比谷公園、浅草公園を訪れた黄炎培は、浅草公園と上海の廟が大変似通っていると、1932年（昭和7）に刊行された『黄海環遊記』の中で述べる。ただし、次のように異なる点を指摘する。

上海の城隍廟とまったく異なるのは、もう一点ある。男女が厨子に対して拜んで祈祷し、供物を献上し、お金を寄付し、禍福を占う。しかし、献上する供物は極めて少ない果物に限られていて、寄付金は多くても一、二円を超えない。燃やしている白い蠟燭は、長さが筆のさやに等しく、しかも筆のさやよりも、まだ細い。いたるところで彼らが小さいことを示している。また彼らが節約して質素であることが分かる。我国がいたるところで贅沢を表示するのは絶対的に異なっている²⁷⁾。

質素さについて記す記録はほかにもあり、食事に関する記述が目立つ。例えば王搏今は、「日本人の食事は大変に簡単である。一般家庭では、ただ大根の漬物があるのみである。もし生卵が一つあれば、ごはんの上に割って醤油を加えるだけで、上等である²⁸⁾。」という。このほかにも、下記のような指摘もみられる。

日本人が質素であること。中等階級の家庭では、毎日、朝晩の二回、飯を炊く。昼飯は、冷飯を食べる。人数が少ない家庭では、朝一度ご飯をつくるのみである。昼、夜ご飯は冷飯を食べる。ただ、旅館や下宿屋、大きな商店、大きな工場、寄宿舎のある学校、人数の多い家庭では、毎日三度、飯をつくる。一般の寄り合いや客を招く場合、二品、三品で、多くとも四品を越えない。(中略) 官吏が役所へ行くとき、教員が学校へ行くとき、商人が会社へ行くとき、労働者が工場へ行くとき、みな、家から鉄の箱を用いて冷飯や冷えたおかずを持ってくる。名は弁当という。儉約して質素である様子は、尊敬に価する²⁹⁾。

中国人が冷えた食事を嫌う習慣は今でもみられる。日本人の場合、冷飯を食すことが直接質素に結びつくわけではない。ただ、自分たちが耐え難い習慣を平然と受け容れる日本人に対し、中国人は文化的な差異という認識を飛び越え、質素であることに驚きを感じるまでだったようである。

④ 女性の地位

また、独特の観点で東京の社会を切り取るような見解もみられる。前述の銭湯に関する記載を残した王撫元の指摘である。1935年(昭和10)、約1ヶ月日本に滞在した際、東京銀座の三越百貨店を訪れた。そこで彼は、「日本の百貨店から女性の職業を論じる」という項目で見聞を残している。

三越商店が雇っている職員は、十中八九が妙齢のかわいい女性である。彼女らは決してこれを一生の職業とはしていない。ただ少女でまだ嫁いでいない時代に、これをして過ごしているのである。日本の女性は、青春時代が、花や玉のように綺麗で、老いると、頭髪が白く顔がしわだらけになり、興味を持つ人もいない。中国では、「うばざくらにも色気はまだ残っている」という言い方がある。日本では、青春は黄金だというのみである。よって大きな百貨店では、一年に一度、新しい女性の店員を募集しているのである。(中略) 大きな商店では、作業の分担は非常に細かく、一つの階にはその階の局長がいて、一つの部にはその部の局長がいる。局長は必ずしも美人ではない。計算ができればよいのである。ただ容姿が醜くなく、みっともなくなければ任に堪えうるのである。局長のほかは、みんなすべて容姿端麗で、傾城の美人である³⁰⁾。

事実の如何はさておき、社会における女性の立場の違いは、日本、そして東京を訪れた中国人にしばしば認識されていた。1930年前後に、東京の病院に入院していた王搏今は、看護師との会話を通して理解を得られた日本女性の生活に対して、「彼女らの地位の不平等さは、昔の中国の男女関係をはるかに超えていた³¹⁾」と、日本における女性軽視の風潮を指摘する。また廖世承も日本の女性の地位が甚だ低いと述べ、社会における女性軽視を指摘する。そして、欧米と比較しても非常な差があるにもかかわらず、変更を加えようとしないうることに疑念を抱き、「この観念が変わらなければ、日本民族の発展にも影響するだろう³²⁾」と結論づける。女性の地位や参政権をめぐることは、既知のように日本においても問題視され議論を呼んでいた。しかし廖世承が日本の発展と関連付けて指摘するまでに、中国人の目には時

代遅れとして映っていたのだろう。

⑤ 愛国心

続いて、日本人は愛国心、愛郷心が強いと見る王桐齡の指摘を取り上げる。王桐齡は第一高等学校、そして東京帝国大学に留学しており、留学中は東京を生活の場としていた。王桐齡は日本人の愛国心、愛郷心が非常に発達しているとし、その背景に日本の地理的な環境、すなわち島国であることが影響しているという。すなわち、四面を海洋に囲まれているため、物の見方が局部的になり、他国ではなく、自国へ関心が向かいがちになると指摘する。さらに、日本では家族観念が中国に比して薄弱であるにもかかわらず、社会秩序が安定し、国家が富強となっている背景に対しても、忠君と愛国を柱とする国家観念が強固であるためという。それゆえ、「公事公益に励み正義を行い、目上の者を敬って従い勇敢に戦地へ赴く」とする³³⁾。

また1940年前後に東京を訪れた薛慧子も、同様に日本の愛国観念の強固さを指摘する。「大和民族は愛国観念が極めて強い。国家を保護する軍人、および在外公使はいうまでもないが、行商人や使い走りにもいたるまでも一旦国家に有利であれば、たいていは身命を犠牲にすることができ、万死を恐れない」という³⁴⁾。国のために自己をささげる日本人像は、何海鳴も指摘する。何海鳴は、中国人はこのような思想を欠いているとし、それゆえに中国人は一握りの散砂のようだと、凝集力のなさを挙げている³⁵⁾。

中国福建省の事例だが、兵役から逃れるために南洋へ逃れた人々がいた³⁶⁾。日本の徴兵制が制度として強固に機能しており、逃れることが困難だったのかもしれないが、既述からうかがえるように、国家観念の違い、社会に蔓延する愛国の程度の差を感じ取った中国人も少なくなかったようである。

第2節 1930年代中頃以降の記述から見る東京の先進性

本節では、中国人が東京の生活を通して見た、日本の先進性に関わる史料を主に紹介する。具体的に、東京の清潔さ、秩序の整然さ、人々の礼儀・道徳、東京の発展の様相などである。これらのうち清潔や秩序といったいくつかの点は、1934年に中国にて開始された新生活運動とも関連が深い。新生活運動とは、当時中国の最高指導者であった蒋介石が指揮した啓蒙運動である。蒋介石は、日本の陸軍予備校に留学した際に学んだ規律や清潔を中国の人々にも重んじさせることによって、中国の人々の集団性や、秩序を形成し、それにより国家の富強を目指すことを掲げた³⁷⁾。国家レベルでの政策として展開されていたこともあり、来日中国人が注視しやすい項目であったのかもしれない³⁸⁾。また、1930年代中頃以降の記述には、中国の東北を中心に、教育事業を展開する日本の政治的影響も見て取れるような記述が存在する。このように、とりわけ1930年代中頃以降の記述は、注意を要するものが多い。政治的要因が、来日中国人の記述に与えた影響に留意しつつも、当該期に彼らが東京をどのように見たのか、関連史料を紹介する。

まず、凌撫元、および曾昭掄による記述を中心に取り上げる。凌撫元は、1935年（昭和10）8月に約1ヶ月日本を訪問し、その間に東京を訪れた。凌撫元は、東京の道路がアスファルトで舗装され、「非常に清潔で塵一つなく、路盤は固く頑丈³⁹⁾」だと述べる。そして、東京および日本に対する印象として、

日本人の清潔さを次のように述べている。

日本人はとても清潔で、生活が厳粛である。大通りでタバコを吸っている者や、物を食べている者、勝手に痰を吐いている者などをほとんど見かけない。また通行人は左によって歩き、互いが出会うと礼儀正しい態度をとる。車に乗ったり降りたりする時、見知らぬ人であっても相争わない。(中略) 喧嘩や言い争い、互いが嘲ってののしりあったり、冷やかしたりするのは見る事が無い。まるっきり、中国の新生活(運動)に合致している⁴⁰⁾。

凌撫元が新生活運動を引き合いに出していることから推察されるように、清潔や秩序といったテーマは、新生活運動が1935年に開始されて以降、関心を集めやすい項目だったのではなかろうか。凌撫元のその他の記述にも、下記に見るように、清潔とともに新生活運動に関連する秩序に焦点を当てた記述がいくつかみられる。

交通警察を調べると、治安を維持するために、平津市(中国)の重要な交差路に、必ず警察が一名、憲兵が一名見張りに立ち、車両を指揮して軍人を抑えている。東京では、麹町区の少数の道路を除いて、警察が見当たらない。十字路には交通信号が一つあって、赤と緑の灯りがそれぞれ一つ付いている。この灯りは四面からみな見ることができ、一分毎、あるいは半分毎に、赤と緑の明かりが互いに一度光る。自動でスイッチを切る。(中略) 通行人や車両は、交通信号に気をつけさえすれば、定まった道筋を遵守して走り、誤りに至らない。さらに日本は法治が久しく、人々は職業があり、悪事をする人がいない。大通りには、もともと警官を配備する必要がない。必要であるのは、車を指揮するためにこの機械をもって処理し、機械にゆだねることである⁴¹⁾。

日本の人々は法を守ることを知っている。全て組織があり、勝手にめちゃくちゃなことをせず、法外に自由を求めない。長年の習慣が風習となって、法を守ることが光栄となり、法に違うことは恥辱となっている。順を追って進み、決して順番を越えて上へ進み、求めるという心理がない。ゆえに日本は統治せずして統治しているのである⁴²⁾。

東京に警察が少ないことは、曾昭掄も指摘する。通りを統制しているのが信号であり、警察が大変に少ないことから、「警察は、まったく、東京の町において見つけにくい人物であるといえよう⁴³⁾」と指摘する。このほか、東京の印象について、曾昭掄は下記のように記し、東京の清潔さや先進性を記している。

私たちは東京で、全部で一週間滞在した。東京は我々が日本で最も長く滞在した場所であり、また我々に最も深い印象を与えた場所でもある。東京に到着して以降、さらに中国とは異なると感じた。日本へ行ったことのない同胞達は、大抵みな上海は素晴らしいと感じている。通りは広く、市場はに

ぎやかで、車、電車などの交通も大変に発達して居る。通りも相当にきれいであるという。しかし、もし東京に行く機会があれば、このような感想は違ってくる。私個人がこのような経験がある。東京へ行ってから、やっと分かった。我々は他所より大変に遅れている。とりわけ日本から上海に帰ってからは、上海の通りは狭く、あまりきれいでなく、店舗はボロボロで規模が小さく、電車、車もまた遅く快適でないと、大変に感じる。世界第三の大都市と誇り、六百万あまりの人口を有する大東京市は、一般的にいて、世界のその他の大都会と較べて、ちっとも遜色がない。東京へ行ったのは、今回が初めてではない。以前、1920年と1926年に、アメリカへ行くために、日本を二度経由した。そして、二度とも横浜から電車に乗って東京へわざわざ行って観光した。一度目に行った時（1920）は、まだ大地震の前であり、（その時でさえ）すでに良いと思った。二度目（1926）は、東京大地震の三年後である。その時、東京は既にほぼ完全に復興していた。ただ横浜はまだであった。今回は残念なことに再度横浜へ行く機会がなかった。東京を見ると、十年前とはまた異なっていた。十年前の東京は、通りを行く人が大変多く、電車はとくに混んで耐えられないほどであった。このたび訪れてみると、街を行く人はすでにとても少なかった。多くの人は、車や電車にのって出かける。電車はあまり混んでいないし、相当に快適である。近代化による交通の便利なものは、ほとんどすべて東京にて眼にすることができる。汽車、車、トロリーバス、電気鉄道、地下鉄道、高架電車など、全てある。各種の車両は極めて広いアスファルトの道路の上を、両側に近代的な西洋建築がある中を、とても早い速度で、桴のような速さで往来している。あたかも近代都市の繁栄の画であるかのようである。日本人は彼らが東京を復興させた功績を最も誇っている。今一度見ると、彼らが自慢するのは、たしかに十分な理由がある。東京の通りはざっとみると、率直に言って、先に知っていなければ、いったいぜんたい、日本なのか、それともアメリカなのか、見分けが付かない。日本式の低い建築は、ほとんどもう容易に見つからない。街行く人と、店舗の看板のほかは、店舗の構造を仔細に見ることによって、やっと東洋の感じが見出せるくらいである。このような構造は、いくぶん、上海の大通りの店に似ているが、それよりも大変に清潔である。一般的に言って、世界の大都市の中で、東京は比較的きれいな部類に入ると言えよう⁴⁴⁾。

上記に紹介した凌や曾は、それぞれ1935年（昭和10）、1936年（昭和11）に東京を訪問している。彼らはともに北京からの来日者である。彼らの記述によると、当時、日中間の往来では、旅券の発行が必要とされなかった。ただし両者とも、日本大使館から、訪日中に「特別の便宜をはかるよう」指示した「証明書」を発行してもらっていた⁴⁵⁾。「証明書」の発行が当時どの程度一般的だったのかは不明であるが、両者とも来日以前より、比較的日本との関係がよかったように思われる。日本との良好な関係の存在が、東京や日本の優れた点を評価する視角に結び付いた側面もあったのではないかとと思われる。

来日中国人をとりまく背後の政治的影響が、彼らの東京や日本に対する記述を規定している事例は、下記の『日出づる国へ』（1940）に顕著に見られる。当史料は、内閣直属機関である興亜院が費用を援助して実現した、訪日旅行団による感想文集である。その中から二つ紹介する。

東京は海に囲まれ山に近く、気候は湿り気があり、風景は優れている。友邦がここに都を立てること多年になる。政治、経済、交通、文化、みな全国の中枢となっている。(中略) 東京の交通については甚だ便利である。住民は和やかで親しみやすく、謙虚で礼儀正しい。国家の各機関、および各百貨店についてはみな立派で堂々たる建物にあり、道路は清潔で平坦である。公園内部には優秀な設備がそろっていて、国内でめったに見ないものがすべてここに集まっている。真に我が国が追いつくことのできないことである。(中略) 市内は病院が林立している。衛生、行政機関、および医学や国民の健康に関係のある各研究所もみなそのようである。また教育が普及していて、人々は日常生活において、衛生に対してみな追及している。これをもって、国民の体格は強健で、精神は健全で、かつ、国家、社会に服務する精神に富んでいる。(中略) 総じて東京のすべての施設を見ると、友邦の政治が公明で、科学が進歩し、人々が和やかで親しみやすい国家であることがわかる。かつ、人々は国家の命令に服従する精神に富んでいる。公共の場所では決して喧嘩の声や、遅れまいと先を争う行爲がない。秩序は整然としている。実に、我国ではめったにみないことである⁴⁶⁾。

国内の鉄道は、蜘蛛の巣のように四通八達し、東京についての記述を探す中でも東京に於いて最も著しく、三十秒毎に列車の発着がある。市内には省線、市電、地下鉄があって、その工事の偉大なることは驚異的である。為に物産の運輸は、極度に便利である。車内は清潔で、乗降するとき押しあうことは少しもない。木炭自動車の運転も頻繁で、乗り心地がよく、そのスピードの早いことは、他国の及ばないところである⁴⁷⁾。

これらの記述からは、東京の発展ぶり、人々のマナーの洗練さといった先進的な側面が強調される。ただ、筆者である彼らの訪日につわる背景を振り返るならば、このような記述の内容を、当該期の東京の姿としてそのまま捉えるのは困難だろう。1930年代中頃以降の史料については、来日中国人の背景をふまえると、その記述から東京の姿を抽出するには、より慎重さを要すべきと思われる。

第3章 日中情勢と東京をめぐる来日中国人の視点

前章では、来日中国人の見た東京の様相について紹介した。とくに第2節では、1930年代中頃以降の中国をめぐる情勢を踏まえつつ、東京の先進性に関する来日中国人の記述に着目した。第1章でも既述のように、昭和初期に来日した中国人は、国民政府や日本の傀儡政権など、複数の政権や状況下から日本を訪れていた。場合によっては、政治的圧力により、来日中国人の日本に関する記述が規定されていたことも第2章第2節の史料から窺えた。このほか、政権や政治環境だけではなく、嫌日、抗日、知日、親日といったように、個々人が日本に対しどのような態度をとっていたのかも、来日中国人の東京や日本についての記述に影響を与えたこともあったのではなかろうか。必ずしも、出身地・生活圏の置かれた環境や、日本への態度が、個々人の日本に関する記述に反映されるわけではないが、どのような視点を持ちながら中国人が東京、日本に滞在したのか、彼らの視点の多様性を、史料を通して再確認してお

くことは、来日中国人の見た東京像をより豊かに捉えるうえで有効な視点になると考える。このような視点から本章では、昭和初期の日中情勢を考えるうえで重要となる、日中間の政治・軍事情勢を背景とする、来日中国人の東京、日本をめぐる記述を紹介する。上記の視点を史料から窺いみることにより、来日中国人に対する東京、および日本の、「外」への対応の様相も知る手がかりになる。

まず、1930年前後の記述を紹介する。日本が中国への勢力を拡大していくなか、東京での生活の中で苦痛を感じたり、抗日意識を募らせたことを記すものである。最初に挙げる史料の著者である徐玉文は、江蘇省無錫出身である。彼女は上野公園へ桜を見に行った帰りに、食糧展覧会を訪れた。そこで、朝鮮館、台湾館、そして満蒙館なるものを見て、大きな衝撃を受けたという。

その後、台湾館と朝鮮館を見て、心の中が既に不快になった。台湾と朝鮮は、数十年前は中国のものではなかったのか？なぜに立派な場所を、自ら維持することが出来ず、よそ様のために贈らなければならないのか？現在、日本は既に台湾を南日本の宝庫と呼ぶようになった。台湾館を出た後は、既に素晴らしいとは思わなくなっていて、入ってきた時のような高まりはなかった。突然、満蒙館という3字が目に入った。飛び上がるほどびっくりした。まさか我国の満蒙を、朝鮮、台湾について、ここ最近のうちに、日本に贈るのだろうか？門の外にしばらく立って、逡巡して進めない。勇気を奮い起こしてその詳細をみた。すると満蒙の物品を陳列しているほか、さらに大きな「満蒙の模型」、「満蒙のポスター」を設置していることが分かった。満蒙地方を現在の朝鮮とみなしているのではなく、山東の青島と済南を一緒にあわせているのである。これはこの模型の地図上から、明らかに見て取ることができるのである。その時の私は、我国の服装を着ていたので、見るとすぐに私が中華民国の女子であることが明らかだった。室内に満ちる日本人の視線が、私に注がれていた。その時の私の心の中は、気詰まりで落ち着かず、刃物でえぐられるよりもつらかった。頭を下げ、再び上げる勇気さえ起こってこなかった。一気に展覧会の門を出て、すぐに車に乗り、寓居まで帰り着いた。一時は、話すことすらできなかった。ああ！同胞たちよ！まさか我々は本当に第二の朝鮮や台湾の人民になるのだろうか？苦痛なる奴隷生活は本当に合わない。やはりみな自強し、抵抗しなければならないのである⁴⁸⁾。

徐玉文はまた、次の文章においても、東京での生活の中から感じた、自国の富強の必要性を説く。

日本は日清戦争で我国に勝ち、日露戦争でまた露国に勝利してから、遂に一躍、世界の第一等国の地位にのぼった。そこで産業が発展し、飛躍的に前進した。衰えていた東京は、突然人口が激増し、市場がくしの歯のように立ち並び、湖や沼を埋めて住宅地とした。郊外に工場を営み、一切の建設は、すべて西欧の様式をまね、完全に西洋化し始めた。(中略)このような壮大な建築と、賑やかな人の群れを見ると、人を驚かせるような進歩の下で、いつも私の神経を刺激し、時代遅れでひよろひよろと歩いていることの恥ずかしさを感じる⁴⁹⁾。

徐玉文に比べ、より東京での生活の苦悩を記すのが下記の綺芳による文章である。

ああ！筆を執ると、ある種の憤りや恨み、悲痛な考えが浮かんで来て、私の心を刺激する。私の両目からは、すぐさま涙が落ちた！いたるところで抑圧を受け、いたるところで白い眼に晒される生活の下で、実に回顧するに耐えない！彼らは中国の留学生を憎悪しており、中国の留学生を見下していることが、いたるところで見出せる。学術や技術の優良な機関では、中国人留学生は、名声、人望のある日本人の紹介がなければ、ほとんど中へ入ることはできず、参観のみでもできない。たとえ入っても、日本人から制限を受け、泥棒や賊を防ぐのと同じように厳しく、上等な部屋は中国人が居住する可能性もないだろう。(中略) わたしは女子で、このような苦痛はさらにひどい。男子は洋服を着ているので、日本人とまだ一様である。女子の衣服は、西洋式のものを除いて、完全に日本のものと異なっている。そのためいつも人の注目を集める。でかけると、いつも日本人から蔑んだ視線や言葉をいくらか浴びる。かりに、腰の長さまでの綿入れの上着と、長いスカートを身に着ければ、時に朝鮮人である、と罵られることもある。朝鮮人女性の服装は、我国の以前の様式と似ているためである。私は、奴隷という名を聞きたくないで、永遠にこのような服を着ないことにしている。(中略) 今年、この地に来て以来、一挙一動、すべて彼らの注目を集めている。ひいては散歩をする時にも、隊を組んだ人がいて、前後で叫び、皮肉を言ってくる。いかんともしがたい状況の中、ただ心を押し殺して、彼らは「世間知らず」であり、「見識の狭い者は何でも疑りたがるのだ」と思い込む。苦勞を経験したものはみな、同様の苦痛を味わっており、眼に触れるものすべてに益々心を痛めている⁵⁰⁾。

上記に見たように、東京での生活において、時に蔑視され、劣等感を覚えつつも、自国の富強や発展のための手立てを学ぼうとした留学生がいたことが見て取れる。

次に紹介するのは、第2章第2節でも取り上げた曾昭掄による記述である。彼も上記の史料と同様に、東京での経験を通して、自国の状況を顧みる。ただし、日本の中国侵攻を明確な否定の下に記していないことに違いが見られる。

国防館は満州事変以降、ある人が寄付して建築したもので、1934年4月になってやっと開館した。(中略) 現代戦争の模型がある所から、私たちは二階に上がって、まず都市の航空施設の模型を見た。この部分は最も面白かった。電気のスイッチを入れると、一セットになった防空の演習が自動的に始まった。初め、街の家屋が全部明るくなった。すぐに敵機が飛んで来て、街中では知らせが響き、少しすると町中の灯りが全て消えた。味方の飛行機と高射砲がみな出動して敵機に抵抗した。敵機が爆弾を投下した後、依然として戻っていき、そこですべて消えていた明かりが、また明るくなった。このような生き生きしたありさまは、疑いなく、国民の国防教育にとって大いに貢献するだろう。私たちもすぐにこのような国防館を有するようになることを願う。(中略) 遊就館は、明治十一年に設立し、二階建ての建物である。中には、日本の各時代の武器と兜と鎧などが陳列されていて、大変おもしろい。そのほか、日本の戦利品も陳列している。大部分は日中戦争と日露戦争で得たものである。他に

満州事変後に東三省から得た物もある。国防館と遊就館は、日本を訪れるならば、ぜひとも見なければならぬ場所である。そこに行ってこそ、やっと日本人の武を尊ぶ精神と彼らの野心を十分に見ることができ、同時に又、我々、長年衰退している中国に対して、尽きることのない感慨を発生させるのである⁵¹⁾。

曾昭掄は前章で既述のように、北京大学にて教鞭をとっていた人物であり、来日手続きについても、日本大使館からの支援を受けている。本史料が刊行されたのは1936年（昭和11）のことであるが、1937年以降、北京も日本占領下に置かれるようになる。華北における日本の影響力や、曾昭掄個人の日本との関係性、及び来日の経緯や、来日者が学生であるのか教授であるのかといった社会的地位の相違も、中国人の東京経験、そして、東京および日本に対する視点や態度に影響したのかもしれない。

最後に、日中戦争開始以降であっても、日本と中国との協力を提唱し、対日平和を目指した来日中国人の記述を取り上げる。下記に挙げるのは何海鳴によるものである。何海鳴は1916年以降、華北を基盤に活動し1938年（昭和13）に新聞界の代表として日本を訪れた。彼は下記の『東遊紀行』執筆時、反国民党を表明し、日本側と親密な関係を構築している⁵²⁾。日本との関係について、『東遊紀行』の巻頭語として下記のように述べている。

友邦から立国精神と近代建設を視察する中で、友邦から誠実な友愛と懇切期待の真意の中、私は友邦が確かに中国の復興を助けることを欲していると理解した。また東亜諸邦の共栄共存、提携協力の光輝で平坦な道をはっきりと認識した。（中略）我々は誠実に友邦の援助と善意を受け入れるべきで、努力して友邦の近代的文明の建設と精神の建設を模倣すべきである。追いついて前進し、手を携えて邁進し、それにより一緒に我東亜民族の最大の光輝を樹立するのである。中国の復興工作をもう緩慢にさせるなかれ。これこそが我が中国の新たな志士たちがこの時代において国恩に報いて民を救い、友邦の深厚なよしみに背かない唯一の大切な道である⁵³⁾。

何海鳴は、東京に到着した後、日本の新聞記者や各機関の代表者からの歓迎を受けながら、東京の各地を訪れ、感想を残した。既知のことではあるが、昭和初期には、何海鳴のような立場にあった者も、東京、そして日本を訪れている。彼が東京にて面会した人々、そして観察した東京とは、本章の冒頭で挙げたような留日学生のそれとは大きく異なる。東京が彼らをどのように迎え、どのような東京体験を与えたのかも、来日中国人の東京をめぐる視点を検討するうえで、考察を要する項目だろう。

本章で扱った史料は、1930年前後から1940年初頭までのものである。10年余りのことではあるが、昭和初期の東京を訪れた来日中国人の多様さがうかがえる。当該期の中国の国内情勢、そして日中情勢を反映し、多様な立場と思想を有した中国人が東京を訪れていたことを踏まえながら、彼らの見た東京を参考に、「外」である中国人の視点から見える東京像を構築することが求められよう。

おわりに

「東遊日記」に見られる東京に関する記述からは、中国人の見た異文化としての東京の姿が浮かび上がる。彼らが描いた東京の様相、文化は、東京が外からどのように映るのか、どのような特徴を有するのかを示してくれる材料となる。その一方で、彼らの残した記述を適切に読み取るためには、彼ら来日中国人がどのような環境下に置かれていたのかを踏まえて考察しなければ困難であることも判明した。本論で紹介した史料においても、執筆者の置かれた環境、彼らのおかれた立場の差異が、東京や日本に対する見解を左右する場合もあり、断片的な史料の寄せ集めでは、史料から構築できる東京像にも限界があることが見て取れた。とりわけ本稿の着目した昭和初期は、日中情勢の変化に伴い、日本と中国人との関係も、中国人の出身地や、置かれた政治環境によって多様な様相を呈していた。中国という日本にとっての「外」が置かれていた国際、国内情勢に照らし合わせながら、来日中国人が東京に向けた視点を詳細に拾うような、「外」に対する視点と、東京という「内」に対する視点のすり合わせを行いながら検討を深めることが、より豊富な東京像を提示するためにも必要となろう。

(付記)

本稿中に引用した資・史料には、現在では差別的で不適切と思われる表記も含まれている。筆者はもとよりこのような差別を容認する立場にはないが、原資・史料が成立した歴史的社会的背景に鑑み、原文や原文に基づいて和訳したものを引用した。

【註】

- 1) なお本調査は、当時、江戸東京博物館専門調査員であった胡艶紅氏が、2017年8月まで担当した。胡氏は光緒期を調査し、筆者は主に民国期以降を担当した。本稿で使用した史料はすべて民国期以降のものであり、筆者が和訳した。誤訳や不適切な翻訳があった場合の責任は筆者にある。
- 2) 東京都立図書館ホームページ (<https://www.library.metro.tokyo.jp/collection/features/catalog/sanetou/>) を参照 (2019年1月17日)。
- 3) 佐藤三郎『中国人の見た明治日本：東遊日記の研究』(東方書店、2003年、4-11頁)。
- 4) なお、本稿の対象時期を含む20世紀初頭の中国人留学生に関する先行研究には、日中関係史、中国近現代史の枠組みから下記のように多くの蓄積がすでに存在する。本稿では、来日中国人が東京に向けた視点や、東京が彼らに向けた視点に留意し、東京および日本を、異文化に身を置く人々の視点から多面的にとらえることに重点を置いて論じていくこととする。

清末の中国人留学生の概要や、日本に対する視点は、佐藤三郎「明治時代前期における中国人による日本研究書について」(『国士館大学文学部人文学会紀要』14、1982、75-90頁)、清水稔「中国人留学生と日本の近代」(仏教大学総合研究所紀要第2号別冊 アジアのなかの日本』、1995、119-138頁)においても紹介される。また、清末から日中戦争期にかけての中国人留学生について包括的に議論したものには、大里浩秋、孫安石編『留学生派遣から見た近代日中関係史』(御茶の水書房、2009)がある。とくに、中国東北からの留学生に関しては、川島真「日本占領期華北における留日学生をめぐる動向」(大里浩秋、孫安石編『留学生派遣から見た近代日中関係史』所収、御茶の水書房、2009年)や、浜口裕子『満州国留日学生の日中関係史：満州事変・日中戦争から戦後民間外交へ』(勁草書房、2015年)が詳しい。また、新生活運動と日本留学との関連についても分析を加えた深町英雄「師か？敵か？：蒋介石・閻錫山の留日経験と近代化政策」(貴志俊彦、谷垣真理子、深町英夫編『模索する近代日中関係』所収、東京大学出版会、2009年)、

- 深町英雄『身体を躰ける政治：中国国民党の新生活運動』（岩波書店、2013年）は、当該期の日本を訪れた中国人が置かれた環境を理解するのに参考になる。
- 5) 註4) 前掲論文清水 120-125頁。
 - 6) 註4) 前掲書浜口 10頁。
 - 7) 註4) 前掲論文 121頁。
 - 8) 武藤秀太朗『「抗日」中国の期限』（筑摩選書、2019、129頁）。
 - 9) 註4) 前掲書浜口 10頁
 - 10) 王桐齡『日本視察記』（北京：文化学社、1928、42頁）。
 - 11) 酒井順一郎「1920年代から1930年代に於ける中国人日本留学生政策」（『留学生教育学会』、第9号、2004、81-87頁）。
 - 12) 註11) 前掲論文酒井 81-87頁、註4) 前掲書浜口 11頁。
 - 13) 孫安石「戦前の外務省の中国への留学生派遣について：明治、大正期を中心に」（大里浩秋、孫安石編『留学生派遣から見た近代日中関係史』所収、御茶の水書房、2009、101-109頁）。
 - 14) 註4) 前掲書浜口 11頁、孫安石「戦前中国人留学生の「実習」と「見学」」（大里浩秋、孫安石編『留学生派遣から見た近代日中関係史』所収、御茶の水書房、2009、104頁）。孫安石は、日本による「対支文化事業特別会計法」の実施が、後に「文化侵略の一つの道具へと変質して」といったことを指摘する。
 - 15) 石島紀之「8 中国占領地の軍事支配」（大江志乃夫他編『岩波講座 近代日本と植民地2 帝国統治の構造』所収、岩波書店、1995、218頁）。
 - 16) 三好章「維新政府と汪兆銘政権の留学生政策：制度面を中心に」（神奈川大学『人文研究所報』2006、33頁）。
 - 17) 註4) 前掲書浜口 8-9頁、阿部洋「1920年代満州における教育権回収運動：中国近代教育におけるナショナリズムの一側面」（『アジア研究』）27巻、1980、3頁）。
 - 18) 註4) 前掲書浜口 20-21頁
 - 19) 註4) 前掲書浜口 20-22頁、劉振生「『満州国』日本留学生の派遣」（大里浩秋、孫安石編『留学生派遣から見た近代日中関係史』所収、御茶の水書房、2009、155-157頁）。
 - 20) 註4) 前掲書浜口 22頁
 - 21) 河路由佳「盧溝橋事件以後（1937～1945）の在日中国人留学生：さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』再考」（『一橋論叢』126号、2001、89頁）。
 - 22) 註4) 前掲論文清水 127頁
 - 23) 王搏今『海外雜筆』（上海：中華書局、1935、14-15頁）。
 - 24) 王桐齡『日本視察記』（北京：文化学社、1928、209頁）。
 - 25) 徐玉文「婦女的娯浴」（生活書店編譯所編『遊日鳥瞰』、上海：生活書店、1929著、1932刊、91-95頁）。
 - 26) 凌撫元『日本遊記』（北平：新北平報出版課、1936、157-163頁）。
 - 27) 黄炎培『黄海環遊記』（上海：生活書店、1932、32-33頁）。
 - 28) 王搏今『海外雜筆』（上海：中華書局、1935、14頁）。
 - 29) 王桐齡『日本視察記』（北京：文化学社、1928、53-54頁）。
 - 30) 凌撫元『日本遊記』（北平：新北平報出版課、1936、61頁）。
 - 31) 王搏今『海外雜筆』（上海：中華書局、1935、10-13頁）。
 - 32) 廖世承「遊日鳥瞰」（生活書店編譯所編『遊日鳥瞰』、上海：生活書店、1930著、1932刊、8-9頁）。
 - 33) 王桐齡『日本視察記』（北京：文化学社、1928、76頁、118-119頁）。
 - 34) 薛慧子『日本觀光記』（中央電訊社、1941、17頁）。
 - 35) 何海鳴『東遊紀行』（天津：庸報社、1938、26-27頁）。
 - 36) 山本真「福州華僑とキリスト教：マレーシア・ペラ州シティアワン及びシンガポール訪問記」（『中国研究月報』66巻5、2012）。
 - 37) 蒋介石は、東京にて、陸軍予備校であった振武学校に留学した。振武学校ではドイツに由来する軍隊の規則が生活方式にも取り入れられ、規律や清潔の維持が求められた。規律や清潔を維持することで自己を律し、身体のみならず精神の鍛練にもなると認識した蒋介石は、新生活運動を通して国民の意識を変えることで、中国の富強を目指した（註4) 前掲論文深町 63-65頁）。

38) ただし、来日中国人の徐玉文が、1929年に、国家の興隆と身体の強健さとを関連付けて論じていることから、新生活運動の開始よりも早い段階で、一定の範囲で同様の思想が中国人の間に存在していたことが窺える。下記は徐玉文による記述である。

日本人は「身体が小さいが精悍である」と世に言う。そして我国の人は「東アジアの病人」とされる。国民の身体が強健であるか否かは、国家の盛衰と極めて密接な関係がある。よって個人と公共の衛生は、とりわけ十分な注意を加える必要がある。(中略) 個人の衛生は、身体の健康と密接な関係がある。健康な身体があつてこそ初めて責任を負うことができ、重大な事柄をなすことができるのである。さもなければ精神が衰微して振るわず、天ほど大きい知識があつたとしても役に立たない。この競争の激しい世界にあつて、国辱がひどい我国は、発展して救済しなければ、国民の身体ではなく、個々人の健全さが興つてこなければ功をなさないのである。(徐玉文「望祖国而興悲」(生活書店編譯所編『遊日鳥瞰』、1929著、1932刊、70-71頁)。

39) 王桐齡『日本視察記』(北京：文化学社、1928、76頁、79頁)。

40) 凌撫元『日本遊記』(北平：新北平報出版課、1936、96頁)。

41) 凌撫元『日本遊記』(北平：新北平報出版課、1936、96頁)。

42) 凌撫元『日本遊記』(北平：新北平報出版課、1936、94-95頁)。

43) 曾昭掄『東行日記』(天津：大公報出版部、1936、101頁)。

44) 曾昭掄『東行日記』(天津：大公報出版部、1936、98-100頁)。曾昭掄は史料のように東京の発展ぶりや清潔さを指摘する。

これに対し、1921年に上海を訪れた長谷川如是閑は次のように上海の様子を述べている。両者の言説には、約15年の隔りがあり、そのまま比較するわけにはいかないが、それぞれの指摘が対照的で興味深い。「私が支那に於ての第一印象は、支那が世界に於ける文明国であると云ふことであります。……實際上海へ来て見て支那が欧米諸国に劣らない文明国であることを実験しました。日本^(マ)辺りでは好く支那は古代の文明国であつて現在は非常なる野蛮国のやうに言つて居りますが、是等は全然現在の支那を知らない人の云ふことであります。私の寧ろ駭いたのは現在の支那には多数の有産階級の殆どが文明を享樂してゐる点でありまして其生活程度なども外人以上であることであります」。上記は、藤井省三『東京外語支那語部：交流と侵略のはざままで』(朝日新聞社、1992、19頁)に紹介されている。

45) 日華学会訳編、曾昭掄著『東行日記』(日華学会、1936、1-2頁)、凌撫元『日本遊記』(北平：新北平報出版課、1936、1-2頁)。

46) 孫樹棻「教育及衛生的普及」(小川直秀編『日出づる国へ：赴日見学団紀行感想文集』、国立北京大学医学院、1940、131頁)。

47) 李志遠「東亜の盟主……日本」(小川直秀編『日出づる国へ：赴日見学団紀行感想文集』、国立北京大学医学院、1940、122-123頁)。なお、本史料は日本語で原文が書かれている。

48) 徐玉文「嚇了一跳」(生活書店編譯所編『遊日鳥瞰』、上海：生活書店、1929著、1932刊、246-250頁)。

49) 徐玉文「東京の今昔」『遊日鳥瞰』(生活書店編譯所編『遊日鳥瞰』、上海：生活書店、1930著、1932刊、184-185頁)。

50) 綺芳「猪狗不如」『遊日鳥瞰』(生活書店編譯所編『遊日鳥瞰』、上海：生活書店、1929著、1932刊、78-81頁)。

51) 曾昭掄『東行日記』(天津：大公報出版部、1936、61-63頁)。

52) 何海鳴『東遊紀行』(天津：庸報社、1938、「巻頭語」)。

53) 何海鳴『東遊紀行』(天津：庸報社、1938、「巻頭語」)。